

国文研ニュース

No.65 SUMMER 2024



げん じもの がたりう たあわせ え まき
『源氏物語歌合絵巻』

目 次

●メッセージ

大規模学術フロンティア促進事業(国文研 DDH プロジェクト) スタート 渡部 泰明 1

●研究ノート

「国書データベース」に望むこと 高木 浩明 2

—共同研究「国文学研究資料館所蔵マイクロ・デジタル資料を利用した古活字版総合目録作成の試み」を終えて—

『狭衣物語』を中心とする中古物語鎌倉期本文の研究と資料整備」に関する研究概要・成果・今後の課題
..... 松本 大 3

●エッセイ

古典籍をめぐる個人的な体験 渡邊裕美子 4

万葉集平仮名傍訓本のこと 田中 大士 6

●トピックス

国文研の改組について 入口敦志・神作研一 8

松野一秀さま 紺綬褒章を受章 神作 研一 8

国書データベースと写本 ピーター・コーニツキー 9

第47回国際日本文学研究集会 齋藤真麻理 10

2023年度第1回こくぶんけんトーク 安政期江戸の連続複合災害 西村慎太郎 10

国際連携部「文献資料ワークショップ」～視野を広げて～ ノット・ジェフリー 11

2023年度「廣瀬資料館セミナー」の開催 太田 尚宏 12

「第2回 春曙文庫セミナー」開催 飯田 実花 12

ないじえるアートトーク

「枕草子を書き終えようとする清少納言一筆も使ひ果てて、これを書きはてばや—」 中西 智子 13

文部科学省情報ひろば展示「震災・原発事故被災地における地域資料の保全と協働」 西村慎太郎 13

総合研究大学院大学日本文学研究コースの近況 齋藤真麻理 14

電子展示室「和書のさまざま」英語対応について 北村 啓子 15

大規模学術フロンティア促進事業(国文研DDHプロジェクト)スタート

渡部 泰明 (国文学研究資料館長)

2024年度より、「データ駆動による課題解決型人文学の創成～データ基盤の構築・活用による次世代型人文学研究の開拓～」事業(略称「国文研DDHプロジェクト」)を開始した。文部科学省の大規模学術フロンティア促進事業として文科系で唯一策定された、10年計画のプロジェクトである。同促進事業として、30万点の画像データ作成・公開を達成した「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」が高く評価され、その後継事業と位置付けられている。

本計画は、4つの領域から成る。

- (1) データインフラストラクチャーの構築
- (2) 人文系データ分析技術の開発
- (3) コンテンツ解析からの展開
- (4) マテリアル分析・解析

これらに基づいて、データ駆動型人文学研究の展開を図るというのが、本計画の目的である。中心となるのは、テキストデータの作成と、それに基づく校訂本文データの構築であるが、校訂本文のテキストデータがどうして人文学の展開に寄与することになるのか。

我が国の古典を書物として公刊する事業は、基本的に私人・企業にゆだねられてきた。古典本文を校訂し、読みやすい表記に整え、さらに注釈や現代語訳・解説を付す、という作業を経て有料の刊行物で提供されてきた。もちろんそこには、私人・企業とはいえ、文化事業に奉仕する高い志が存した。また、民間の自由で多様な発想に支えられたことは、人々の、古典を共有することへの自覚と責任を育てた。大いに評価されるべきであり、その精神はこれからも私たちが継承していかなくてはならない。

ただ困った事態もまた生じた。本文を利用しようとするとき、権利関係の問題を惹起して、自由な再利用に制限がかかるのである。時代は研究データのオープン化を強く要請している。垣根は低い方がよい。そこで古典本文を、わかりやすく、二次使用に支障ない形で提供することが求められている。無償で公

開し、自由に利活用することが可能な、もちろん最新の研究成果を踏まえた、信頼するに足る本文。これをたやすく入手できる環境を、多くの人が求めている。我が国の古典文学を継承する国立の機関として設置され、現在は法人化して、自由な創意工夫を基本に運営されている当館にふさわしい事業といえるだろう。

語釈や現代語訳がそれに紐づけられれば、さらに利用度も活用範囲も格段に向上することが期待される。広く古典研究者に裨益するところ小さくないはずだが、それ以上に、古典以外の研究者や、一般市民、学生・生徒・外国人へと古典を全面的に開いていくことだろう。古典の知恵に学ぼうとする社会科学や自然科学の研究者に、新たな領域を開拓することもあるだろう。中等教育の現場にも、データを用いた新たな教育の方法論を提示するに違いない。人文学の展開への寄与を唱った理由の一つである。

古典は、あがめ立て、神棚に祀り上げるものではない。我が事として、その表現に参加するものだ。とくに日本古典は、古来それを材として表現を行うことで、言い換えればその表現に参加することで、新たに再生していくものだった。

すべての人が古典に参加し、古典を再生することを目指して、私たちは歩み進もうとしている。いったんは理想に賛同はしてくれても、具体的な成果を示さなければ、すぐに予算は召し上げられるだろう。当館だけで成せる仕事でもない。古典を愛する方々の応援と支援とを、心からお願いしたい。

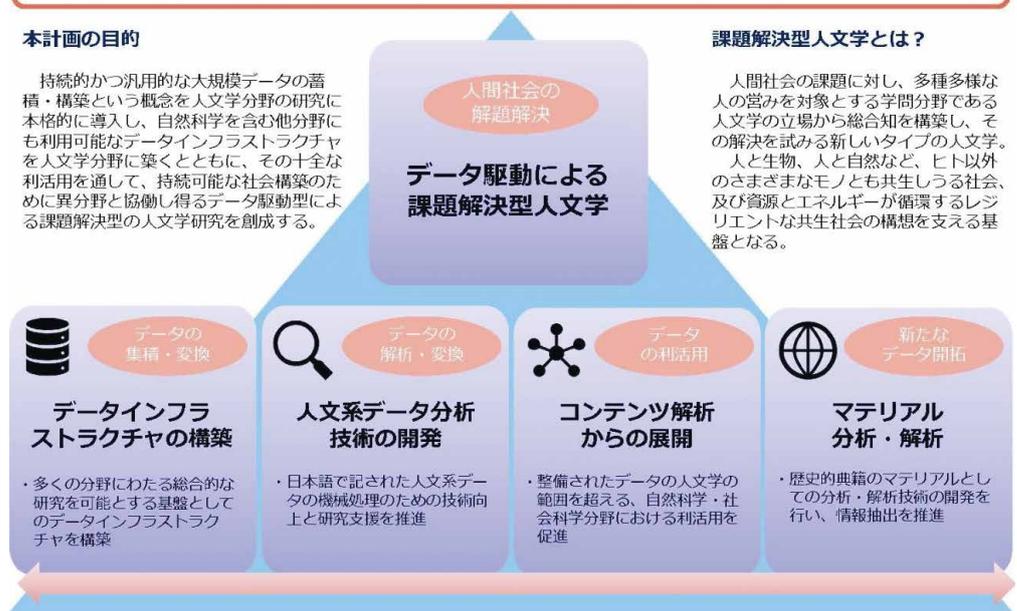
4つの研究領域からデータ駆動による課題解決型人文学へ

本計画の目的

持続的かつ汎用的な大規模データの蓄積・構築という概念を人文学分野の研究に本格的に導入し、自然科学を含む他分野にも利用可能なデータインフラストラクチャーを人文学分野に築くとともに、その十全な利活用を通して、持続可能な社会構築のために異分野と協働し得るデータ駆動型による課題解決型の人文学研究を創成する。

課題解決型人文学とは？

人間社会の課題に対し、多種多様な人の営みを対象とする学問分野である人文学の立場から総合知を構築し、その解決を試みる新しいタイプの人文学。人と生物、人と自然など、ヒト以外のさまざまなモノとも共生しうる社会、及び資源とエネルギーが循環するレジリエントな共生社会の構想を支える基盤となる。



特定研究（一般）

「国書データベース」に望むこと

—共同研究「国文学研究資料館所蔵マイクロ・デジタル資料を利用した古活字版総合目録作成の試み」を終えて—
高木 浩明（近畿大学非常勤講師）

国文学研究資料館には、国内外の所蔵機関で撮影した古典籍の膨大なマイクロフィルムと、それを焼き付けた紙焼写真本が豊富に所蔵されている。その蓄積を礎に、2014年に開始された歴史的典籍NW事業によって、現在は30万点におよぶ古典籍画像のデジタル化とその公開がされるまでになった。

近くにインターネットの環境さえあれば、国内外の古典籍の画像が高精細のデジタル画像によって見るだけでなく、複数の本の比較を画面上で行うことができるようになったことには驚きを禁じ得ない。今後も画像データはさらに蓄積され、公開されてゆくであろうが、蓄積されたデータを「研究資料として」、その数に見合う十分な利活用が現在果たされているかと言うと話はまた別である。蓄積されたデータを十分に利活用するための方法はないのか、そうした声を聞いて手を挙げたのが、私たちの共同研究、「国文学研究資料館所蔵マイクロ・デジタル資料を利用した古活字版総合目録作成の試み」（代表、高木浩明、共同研究者、阿部亮太・海野圭介・佐々木孝浩・竹内洪介・中西保仁）である。標題にもある通り、まずは古活字版という書物を突破口にした利活用に向けた試みである。

「国書データベース」の書誌検索で「古活字」とキーワードを入れて検索すると、現在760件の資料がヒットするが、これは古活字版を覆刻した整版など古活字版ではないものも多く含んだ数字である。そこであらためて「国書データベース」（共同研究の開始当初は「日本古典籍総合データベース」、「新日本古典籍総合データベース」。以下DB）から古活字版を抽出する作業を共同研究の柱の一つとして行うことにした。そしてもう一つの柱として、古活字版を所蔵する機関において、可能な限り古活字版の悉皆調査を行うことにした。個人的には15年前から本格的に所蔵機関ごとの古活字版の悉皆調査を行い、2000点余りの古活字版の書誌的データを蓄積できているが、共同研究を通して、さらなるデータの蓄積と更新を行うことを目論み、国立国会図書館に所蔵される294点（現在は295点）の古活字版を始め、多くの所蔵機関で悉皆調査を行い、未知の伝本と新知見の発掘に努めた。その成果は『調査研究報告』の第43号と44号等に報告している。

本稿では紙幅の制約もあるので、前者のDBからの古活字版の抽出作業について報告するとともに、DBの今後の課題について述べることにする。

まずは共同研究のための予備作業として、川瀬一馬氏の『増補古活字版の研究』の索引と、私のこれまでの調査の経験を振り所にして、DBを片っ端から見て、古活字版や古活字版の可能性のあるものを抽出する作業を行った。以

後もDBで随時画像が公開されるたびにこの作業を行うのが私の日課になった。もっともDBの書誌注記には古活字版と明確に記されているものはほとんどなく、抽出作業は誰にでもできるわけではないので、抽出と一つ一つの資料への書誌情報の付与は私が主に行い、データをExcelの一覧表に反映したものを共同研究者の阿部亮太氏が再度確認し、その後他の共同研究者にも回覧して、意見交換の材料とした。DBには多くの画像が公開されているものの、書誌情報が欠如していることが多い。これが大きな問題である。

最近の例を挙げれば、東洋大学附属図書館が所蔵する古典籍のうち、哲学堂文庫と百人一首コレクション3188点がDBで公開されたが、この中の一点、『天台名目類聚鈔』てんだいみゆうもくろいじゆしやう（七卷十三冊）が古活字版であった。古活字版では珍しい附訓が植版された本であるが、このデータには、「刊」、すなわち刊本（版本）という情報があるものの、出版事項や書誌注記には何ら記述はなく、本の性格まではわからない。当該本には、第二冊（第一末）の巻末に、「于時寛永元年甲子極月下旬／於洛下四條寺町中野市右衛門尉刊摺之」の刊記があり、さらに画像が公開された哲学堂文庫の本には、各冊の巻末に「寛永二曆乙丑拾月廿五日 黒谷中興了の（花押）」と墨書された識語までであるにも関わらず、DBにはこれらの情報が一切記載されておらず、DBの役割を果たしていない。

今回、私が古活字版であることを疑い、画像を確認していなければ、当該資料は埋もれたままになっていたであろう。古活字版なら書誌注記に古活字版とだけ記載しておいてくれば、DB中の古活字版を検索することが可能であるが、記載がないため、蓄積されたデータの多くは埋もれたままになっているのが現状である。実際、私たちがDBから抽出した古活字版は、2000点を優に超える。ここで先述した現在のDBから検索できる古活字版の数を思い出してほしい。DBの中にどれだけ多くの古活字版が埋もれたままになっているかわかるはずである。私たちがDBから抽出し、書誌情報を付与したデータは、『調査研究報告』で公表する予定である。これを今後DBにどう反映するかは今後の課題となる。

繰り返しになるが、書誌情報あつてのDBである。公開される画像を有効に利活用するためには、その本がどういう性格の本であるかを知る必要があり、そのためには書誌情報は不可欠である。今後、古活字版以外でも、DBの書誌情報の充実を図ることが求められる。これは国文学研究資料館の今後の大きな課題となるであろう。ぜひとも実践してもらいたい。

特定研究（一般）

『『狭衣物語』を中心とする中古物語鎌倉期本文の研究と資料整備』に関する研究概要・成果・今後の課題

松本 大（関西大学教授）

本研究は、鎌倉期写本が集中的に残存する『狭衣物語』を対象として、平安時代物語の作品享受の本質を、鎌倉期書写の現存伝本から浮かび上がらせることを目的としたものである。研究組織としては、代表者の松本の他に、研究分担者に岡田貴憲、瓦井裕子、須藤圭、古田正幸、ノット・ジェフリーの諸氏を据え、これに池原陽斉、川上一、小林理正の諸氏の協力を得た。

平安期の写本を持たない平安時代物語作品にあって、鎌倉期本文は平安時代本文の様相を浮かび上がらせる潜在的可能性を持つが、大半の作品では鎌倉時代写本ですらも十分に残存しておらず、また資料整備の途次も影響し、効果的な研究がなされていない。本研究では、この問題を改善する一助として、他作品に比して鎌倉期写本が集中的に残存する『狭衣物語』の特性を活かし、鎌倉期本文の整備を行いながら錯綜する本文異同の様相を把握し、作品享受の実態を解明していった。

整備対象とした鎌倉期写本は、最善本として多く用いられる深川本と、未提供本文を含む6本（為明本・為家本・慈鎮本・為秀本・為相本・松浦本）で、これにかつての流布本と推定される古活字本を加えた。この8本について、単に各本文を提供するだけでなく、それらの逐次的な比較、および他伝本の将来的な拡充にも役立つよう、全文の段組対照形式での提示を試みた。本研究の具体的成果については、『諸本対照狭衣物語』として青簡舎より順次公刊していく予定にあり、2024年秋には第1冊目（承応板本・慈鎮本・深川本）の刊行が控えている（2024年度科学研究費助成事業（研究成果公開促進費）（学術図書）・課題番号24HP5027）。

この本文整備は、個人研究での達成が困難な大規模な本文資料の提示にとどまらず、実際の享受実態に基づいた『狭衣物語』の本質追究や特徴把握を可能にする、研究史上の重要な基盤整備の意味を持つ。鎌倉期の複数の本文を提供することで、各伝本が持つ物語世界を並行的かつ総体的に捉えることが可能となり、深川本に強く依拠する現状の刷新が見込まれる。また、複数の作品世界の集合体という視点を『狭衣物語』研究史に提示し、作品性格の抜本的な捉え直しを実証的に行うことが出来るのではないかと考えている。

2024年3月11日（月）には、3年間におよぶ共同研究の

締めくくりとして、国文学研究資料館にて公開研究会を開催した。前半は後藤康文氏による講演、後半は「本文データ作成・公開の今後」と題するミニシンポジウムを行い、本研究で鎌倉期本文を集中的に整備・把握・比較したことによる知見を共有した。本研究に取り組む前の段階では、鎌倉期本文は、平安期の様相をより多く留めていると目される点や、平安期本文の復元に資する部分を持つ可能性を有する点で、やや手放しにその価値を高く捉えていた。たしかにそうした一面も十分に有し、本文研究において重要な位置付けであることは変わらないものの、すでに鎌倉期本文でも平安期本文に回帰することの出来ない乖離があることも浮かび上がってきた。鎌倉期本文として一概に把握出来ない部分を、どのように規定するか、どのように扱うべきかは、今後の大きな課題である。この点に加え、鎌倉期における散文書写の実態・姿勢という新たな検討課題も提示され、従来の検討を抜本的に塗り替えるような視点や方法が希求されるに至った。これらの事象や問題点は、『狭衣物語』という作品に限ったものではないと容易に想定されるが、資料の少なさもあって見落とされてきた部分であったと考えられる。

本研究はひとまずの区切りを迎えたが、今後も鎌倉期本文をめぐる研究は継続していく方針である。『源氏物語』『伊勢物語』などの他の平安散文作品にも対象範囲を広げつつ、従来研究の抜本的な見直しを積極的に目指していきたい。



古典籍をめぐる個人的な体験

渡邊 裕美子（国文学研究資料館基幹事業センター委員会委員、立正大学文学部教授）

調査収集に関するエッセイということでお引き受けしたものの、さて、いざ書こうとすると、鋭い洞察や提言などできるわけではなく、と言って、今さら何とかできるわけでもなく。観念して、ささやかな個人的な体験を記すこととなりますが、どうかお許しを。

◆調査を始めたころ

初めて一人で古典籍の調査に出かけたのは博士課程在学中だったと思います。大学院の橋本不美男先生の文献研究の授業で基礎的な訓練を受け、関係する入門書を読んだ程度で、経験値は限りなくゼロに近く、出かける前は不安で仕方ありませんでした。それでも、文献調査は必須と思い、『国書総目録』（もちろん書籍版）などで調べた所蔵先に、やみくもに電話を掛けたり手紙を書いたりして閲覧を申し込みました。当時は『最勝四天王院障子和歌』の研究にとりかかったところでした。

撮影が許されたところには、カメラと三脚を持ち込んで撮影しましたが、これが一苦勞でした。手軽なオートフォーカスの一眼レフはもう出回っていましたが、書影は手でピントを合わせ、白黒フィルムで撮影するのがよいとされていて、それがわたくしにはとても難しかったのです。すぐにそうした写真撮影は一般的ではなくなりましたから、そのような調査を経験した最後の世代ではないかと思えます。それで、現像してみたら、ほぼすべて真っ黒なんてこともありました。もちろん、写真はあくまで補助と考えていましたので、調査自体は無駄にはなりませんでした。取り返しのつかない失敗したような気分になり、自分の不器用さに絶望しました。

◆本と巡り合うということ

それでも、研究をやめるつもりがなければ、調査は続けるしかなく、あきらめずに続けているうちに嬉しい出来事もありました。確か和歌文学会例会の会場でのことでした。半田公平先生が、風呂敷に包んだご架蔵本を、返却はいつでもよいからおっしゃって、お貸しくださったのです。いま思えば、教え子でもなく、古写本の扱いに慣れていそうにない駆け出しの研究者に、よく無条件でお貸しくださったと感謝しかありません。

この話には、続きがあります。20年後くらいでしょうか、慶応義塾大学斯道文庫に新しく収蔵された本があると聞いて調査に行ったところ、なんとそれはかつて半田先生が所蔵されていた本だったのです。本の「顔」を見ただけでははっきりと思いつけなかったのですが、対校作業をしてい

て気が付きました。この本は、半田先生がご所蔵なさるまで200年以上旅をしてきたのでしょうか、こうして再び巡り合えたことの不思議さを思い、理想的な環境に落ち着いたことに感慨を深くしました。

書誌データを情報として処理することはとても大切ですが、本は情報でも記号でもありません。書写されてから数百年の旅を経て、自分の目の前にある本は、これから先も旅を続ける。その大きな時間の流れの中で、たまさかの僥倖を得て本と出会っていることを忘れてはいけません。こうしたことは、この『国文研ニュース』のエッセイなどで既に何度か言及されているように思いますが、個人的にも実感するところです。

◆調査と経験

最近、かつて写真撮影で大失敗した所蔵先に、またお邪魔する機会がありました。当時、通された部屋は、記憶の中では、うす暗く、重い空気が漂っていて、管理の担当者の方から大きなプレッシャーを感じたのですが、印象がまったく違って驚きました。明るい部屋と親切な担当者の方のお陰で、気持ちよく調査に没頭できました。実際に場所自体が変わっていたこともあるでしょうが、それ以上に、年齢を重ね、自身の経験値が上がっていることが大きいと思いました（個人的な比較の問題です）。おどおどした若い研究者の卵に貴重な古典籍の閲覧を許可するのは、むしろ所蔵先の方のほうが不安でしょう。それでも、経験しないと経験値は上がらないというパラドクス。閲覧を許可してくださる所蔵先のご厚意に感謝し、本そのものへの敬意を忘れずに、調査を重ねるしかないのだと思います。

◆デジタル画像公開時代の調査

近年の人文学関連のデータベースの整備は目を見張るものがあります。なかでも国文研の「国書データベース」は文献調査に必須のデータベースです。イメージ画像がどんどん追加公開されていて、少し間を置いただけで状況がまったく変わっていて、思わず、えっ！と声を挙げてしまうこともあります。

それでも多くの方が指摘されているように、どんなに高精細のデジタル画像が公開されても、実際に本を調査することの意味は、やはり失われたいのだと思います。

公開画像がない場合、書誌情報も、本文異同もすべてを漏らさず記録しなければならず、時間と労力がかかります。それが、多くの古典籍のデジタル画像がいつでも確認できるようになったことで、調査の効率は各段に上がりました。

調査では、実際に見なければわからないこと、たとえば墨色や紙質、改装の有無や裏打ちのあり方、紙背文書の有無などの確認に集中できます。この際、国文研が創設以来、蓄積してきた貴重な調査カードを公開する「日本古典資料調査記録データベース」は、とても有益です。大学院生の時に、これがあればどんなに心強かったろうと思わずにいられません。「国書データベース」に統合検討中とのことで、早期の実現を待ち望んでいます。

ただし、本を実見したいと思っても、所蔵者から「デジタル画像を公開しているのだから、基本的にそちらで見てほしい」と言われることも多くなりました。確かに文化財を守る観点からは仕方ないことでしょう。調査にあたっては、事前準備を怠りなくして、何が目的なのか、明確に自覚して臨むことが求められているのだと思います。

◆軸装された古筆断簡

かつて「通具俊成卿女歌合」^{みちともしゅんせいけいじょうのむすうたあわせ}について考えていた時期がありました。この歌合は若い藤原定家が判を記していて、資料としては定家の自筆草稿の断簡しかありません。断簡に関しては、国文研が「古筆切所収情報」をリポジトリで公開していますが、その断簡情報は限定的ですし、「国書データベース」はもちろん断簡までカバーしていません。データベース構築がいかに困難な作業かを脇におけば、こうした断簡しか残されていない資料のデータベースがあれば便利だろうと夢想します。

さて、件の歌合については、その書写のあり方から、もとは綴葉装であったと推測されます。綴葉装をばらすと、重ねた紙の一番上以外は、左右の丁には離れた箇所が書写されていて、文意がつながりません。現状、行間を空けずに続けて書写されているように見える定家の判詞が、意味が通らず考えあぐねていたところ、美術品として加工されて左右の丁が継がれたからだと指摘されて、なるほど、と膝を打ちました。しかし、その継がれたと指摘された箇所が、判詞の内容からすると、どうしても2行ずれているように思われました。

この歌合断簡は個人蔵が多いのですが、掛け軸となっている問題の切れは、幸い東京国立博物館の所蔵でした。熟覧が許可されて実見すると、推測したとおりのところで紙を継いで、切れてしまった字画の一部を墨で書き足しているではありませんか！さらに左側の余白も紙が継がれたものだったことがわかりました。現在、この軸はweb上で公開されていますが、左右の丁が継がれた箇所は画像では確認できません。こうした紙継ぎなどの技術は本当に素晴らしいと感嘆する一方で、実態を把握するのはなかなか難儀です。

◆古記録紙背の文学関係資料

こんなふうに調査に出かけると、胸が高鳴ったり、絶句したりする機会に出くわすことがあります。そのような中でもう一つだけ、幸運な体験について記しておきましょう。

30代から参加していた明月記研究会は、五味文彦先生の指導のもと歴史と文学を専門とする者が定家の日記の読解に取り組んでいて、本当に多くのことを学びました。『明月記歌道事』を取り上げた際に、分担をしたのが『千載和歌集』成立をめぐる記事でした。これには大変重要な関連資料に俊成本『春記』紙背文書があるのですが、調べてみると、戦前に荻野三七彦氏が報告して以降、誰も調査できていないことがわかりました。

研究会で報告すると、明月記研究会のメンバーでもある東京大学史料編纂所のチームが、武田科学振興財団杏雨書屋^{きょううしよ}に継続的に調査を行っていて、そこに俊成本『春記』が所蔵されているというのです。すぐに調整をしていただき、編纂所メンバーの調査の折に同行させてもらうことになりました。重要文化財である俊成本『春記』の熟覧が許可されたのは、編纂所の方々が長きにわたって杏雨書屋と信頼関係を築いてきたからこそだと思います。『春記』紙背の俊成自筆「花月撰歌合」草稿と向き合ったときの厳粛な気持ちは忘れられません。また、その折、日本史研究者の遠藤珠紀氏から受けたご教示の数々は非常に大きいものでした。

この俊成自筆草稿も、まだ「国書データベース」ではカバーされていません。大変便利なデータベースではあるけれど、それがすべてではないことを意識しておく必要があるでしょう。

◆調査がもたらすもの

この調査は12月25日でした（みなさま忙しくて、そこでしか日程が組めなかったのです）。一日中、会議室にこもって、夕方、暗くなる時分に外に出ると、繁華街ではありませんが、それでもクリスマス気分が漂っていました。わたくしはと言うと、そんなこととはまったく無関係の充実感で満たされていました。

その後、この調査結果を報告するだけでなく、関連して『千載集』の成立と伝流、「花月撰歌合」の撰歌方法とその意義など、いくつかの論文を書くことができました。調査をしたことが、新しいテーマを引き寄せ、研究を押し広げていく原動力になったのです。調査がそのような果実をもたらすこともあるということを、若い方にはぜひ知ってほしいと思います。

万葉集平仮名傍訓本のこと

田中 大士（国文学研究資料館共同研究委員会委員、日本女子大学文学部教授）

1 万葉集平仮名傍訓本

筆者は、2023年度から国文学研究資料館の共同研究「万葉集平仮名傍訓本の総合的研究」（～2025年度 研究代表者新沢典子氏）に共同研究員として参加しています。万葉集の伝本でも、この平仮名傍訓本は、広く万葉集伝本を扱う『校本万葉集』（首巻 1925年）にも言及がなく、一般にはよく知られていない本なので、いかなる本で、どのように研究の俎上に載ったのかについて述べておきたいと思えます。

平仮名傍訓本とは、万葉集の漢字本文の右傍らに平仮名で訓が付されるという、万葉集の伝来史上きわめて希な形態の本であり、各地に同様の本が複数見られます。国文学研究資料館に勤めていた2013年頃、当時の今西祐一郎館長から「うちにある江戸時代の万葉集写本を調べなさい」と命じられました。江戸時代の写本ということで、当時の流布本である寛永版本が元本であろうと当たりを付け、調べ始めると、はたして寛永版本の片仮名の訓を平仮名に直しただけの本と判断が付きました。今西館長には、「元本は寛永版本でした」と一言報告しただけでした。私にすれば、それで十分な報告に思えたわけです。寛永版本は、鎌倉時代の万葉集校訂本である仙覚校訂本が様々な紆余曲折を経て本文が固定化した、いわば万葉集伝本の最終形態と言ってよいものです。それをまるごと写した（と当時は思い込んでいました）伝本になどさして調査の意義はないと当時は本気で考えていました。

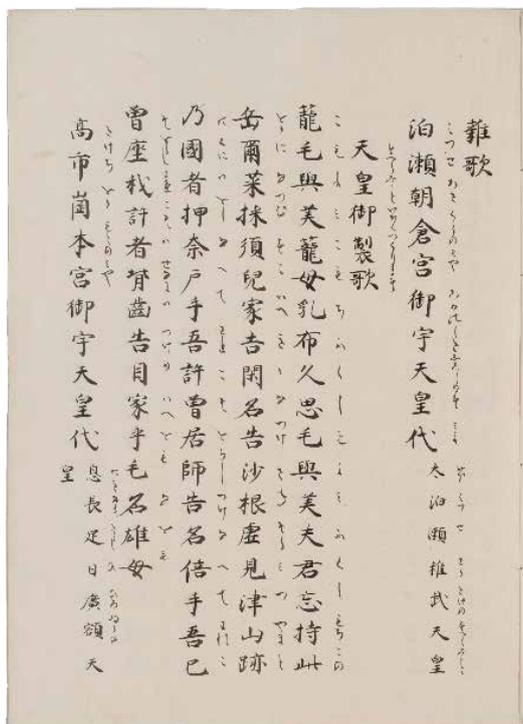
ところが、日本女子大学に転出して、奈良県立万葉文化館の共同研究（「万葉集を訓んだ人々・人々の読んだ万葉集」2016年度～2017年度）を行うことになったとき、当の万葉文化館にも同じような平仮名傍訓の万葉集伝本があるのを知ったのです。さらには、万葉文化館の共同研究の代表者である乾善彦氏が勤める関西大学にも同様の本がありました。その後、同じ共同研究のメンバーだった城崎陽子氏の尽力で獨協大学にも別個の本が新たに購入されることに

なりました（後には日本女子大学でも購入しました）。当時全部で5本の存在が明らかになったわけです。これだけ資料が集まれば、まとめて調べるべきだと言うことで、共同研究の課題の一つとして、私が平仮名傍訓本（群）の調査を担当することになりました。

これだけの数の伝本を突き合わせると、相互にそっくりであるとは言え、本ごとに微妙な異同は見つかりました。違いの解明のためにはじめに頼ったのは、『校本万葉集』（諸

本輯影）にある、寛永版本の本文ヴァリエーションの記事でした。同書には、巻二、二一三の一部の歌本文が異なっている三種類の版本が表示されていたのです（第百五十六 寛永版本萬葉集三種）。ところが、平仮名傍訓本の方にもこの異動に呼応する本が見いだされたのです。版本という印刷物の間に異同があるという事実も興味深かったのですが、それに平仮名傍訓本も呼応するかも知れないという現象には興奮させられました。しかし、おそらくほとんど同じ内容であるだろう寛永版本間にどの程度の異同があるかを短期間で探するのは難しい。それで、あれこれ調べて、それらしい本を見いだしたと思ったのが木村正辞の『刻本万葉集復旧』（1911年）で

した。まさに小躍りするような喜びでした。ところが、この本は、私が求めている寛永版本間の異同を示すものではなく、活字付訓本（古活字本）と寛永版本（製版本）との異同を示す書だったのです。まさにぬか喜びでした。そこで、共同研究の報告は、寛永版本間の異同と当の平仮名傍訓本の異同が呼応するかも知れないと示唆しつつ無難に収める形でまとめようということになりました。しかし、報告の資料のまとめに入る寸前に、これら平仮名傍訓本が使っていた本は、版本のうち、寛永版本か、その前身の活字付訓本かという問題に突き当たりました。ただ、この時私の中では、はじめから結論は出ているのです、寛永版本であると。それは、『校本万葉集』（首巻）で述べられていた活字付訓本の流布が広がっていないという説を鵜呑みにした思



「万葉集平仮名傍訓本（国文学研究資料館蔵）」

い込みに依るものであったのですが、いざ、資料を確定するととなると、そこには何ほどの根拠もないことを痛感することになりました。では、どうやって依拠した本が活字付訓本か、寛永版本かを決められるか。決定打が出ないまま発表資料提出の時期は迫っていました。そのときふっと思い出したのが、さきほどの『刻本万葉集復旧』だったので。この本には、今知りたい活字付訓本と寛永版本との異同が網羅されていました。地獄に仏とはこのこと、あわててその一覧を見比べると、平仮名傍訓本諸本はどちらの本に依っているというのではなく、両本の異同部分は、平仮名傍訓本諸本をみごとに2つのグループに分けたのです。すなわち当時調べていた五種の伝本は、3対2で、活字付訓本に近いグループ、寛永版本に近いグループにきれいに分かれたのです。まさに想定外のことでした。万葉文化館には、この劇的な変化を伴った発表資料を締め切り当日に発送しました。

お互いがそっくりな平仮名傍訓本諸本が、やはりそっくりである活字付訓本に似る本と寛永版本に似る本とに明確に分かれるとは驚きの調査結果でした。まずは、この結果は、従来その享受の様相が知られていなかった活字付訓本の明確な享受の証拠としてあげられることはもとより、平仮名傍訓本諸本が2グループに分かれることが、平仮名傍訓本諸本が作成される工程の解明に資するであろうことが期待されることとなりました。この成果は、万葉文化館の『万葉古代学研究年報』(第17号 2019年3月「新たな万葉集伝本群の発見—万葉集平仮名傍訓本—」)に掲載されました(以下、旧稿と呼びます)。

2 研究の進展

それ以降平仮名傍訓本は、その後の調査などで知られている本が9種にまで拡大しています。また、旧稿で、活字付訓本に近い本と寛永版本に近い版本とで截然と分かれる由を述べましたが、その結論に疑義を挟む意見も出ています。古澤彩子「万葉集平仮名傍訓本底本別典拠一覧」(『万葉写本研究』科研費18H0064研究成果報告書 2023年3月)で、活字付訓本と寛永版本との異同が、先述の『刻本万葉集復旧』以上に存する事を指摘し、それら全体に於ける異同一覧を提示しています。それに依れば、本によって、たとえば活字付訓本グループとされている本が部分的には寛永版本に依っているところが少なからずあることが判明しています。旧稿後に、比較できる伝本数が増えたため、平仮名傍訓本諸本との関係が、より詳細にわかるようになったことも関わっているでしょう。また、現在進行する

国文研の共同研究では、旧稿で可能性を示しつつ結局は捨ててしまった、寛永版本間の異同が平仮名傍訓本諸本との関係に関わる点について、もう一度可能性を探るべきであるという発表(茂野智大「新潟大学附属図書館蔵『万葉集』平仮名傍訓本調査報告」国文学研究資料館共同研究研究会 2024年3月10日)が現れ、また、底本によって2グループに分けられるという考え自体を、一旦考え直してはどうかという意見も出されています。また、茂野氏は先の発表で、見返しの裏紙に書き損じの紙が使われており、そこから制作の過程を追求しようという指摘も行っています。

旧稿の反響についていえば、旧稿をきっかけに、研究者の中で所属する機関が所持する万葉集を見直そうとする動きが見られます。小林真由美「成城大学本万葉集について—活字付訓本を底本とする平仮名傍訓本万葉集—」(『成城国文学』第37号 2021年3月)は、旧稿を引用しながら、成城大学蔵の平仮名傍訓形式の伝本を紹介していますが、この本は、他の平仮名傍訓本ときわめて似た姿なのですが、平仮名傍訓本諸本がそろって一面八行であるのに対して、一面七行の本と一面行数が異なっています。他の本がどれも一面行数を含め版本の造りにそっくりであることを考えると、この本が平仮名傍訓本諸本といかなる関係にあるかはにはわかには判断できませんが、他には希な平仮名傍訓本形式の本が、またひとつ見出された意味は大きいと言えます。また、倉住薫「大妻女子大学図書館蔵『嫁入本万葉集』：翻刻・巻一」(大妻女子大学紀要(文系)第54号 2022年3月)は、やはり旧稿を参考にしながら、大妻女子大学図書館蔵の写本を紹介しています。これは、傍訓本ではなく、漢字本文のない読み下しの本です(但し、傍らに漢字が振ってある)。このような本は、平仮名傍訓本との直接の関係は薄そうではありますが、共同研究の調査でも他にも似たような伝本は見出されており(現在調査中)、別個の量産万葉集写本として注目されます。

以上のように、平仮名傍訓本は、旧稿以降、諸本についても、類似の伝本についても大きな広がりが見出され、国文研の共同研究でも着々と研究が進展しています。従来の万葉集の伝本研究では、いわば埒外に置かれていた江戸時代の量産された万葉集写本の研究は、ここに来て新たな展開を見せ始めています。大きな成果をぜひご期待いただきたいと思います。

国文研の改組について

この2024年度から、新たな大規模学術フロンティア促進事業「データ駆動による課題解決型人文学の創成—データ基盤の構築・活用による次世代型人文学研究の開拓—」(以下「国文研 DDH プロジェクト」と略記)がスタートしました。これを承けて、わたくしども国文研では2024年度より全館的な改組を行い、「国文研 DDH プロジェクト」推進のためのいっそうの機能強化を図っています。ここにはその概要を4点に絞って記します。

【1】プロジェクト推進室の新設

「国文研 DDH プロジェクト」の円滑かつ強力な推進のために、10年間の時限付きで、3センター(基幹事業センター・古典籍データ駆動研究センター・基盤データセンター)を統括する「プロジェクト推進室」(推進室長は渡部泰明館長)を新設します。

【2】基盤データセンターの新設

より高次の観点から「収集」を進めるために「基盤データセンター」(センター長は山本和明研究主幹)を新設します。特に向こう10年間で、寺社や財団・個人蔵の古典籍を中心にさらに15万点のデジタルデータを作成して「国書 DB」のいっそうの拡充を目指すとともに、27万点のテキストデータ作成の進捗管理等も行います。

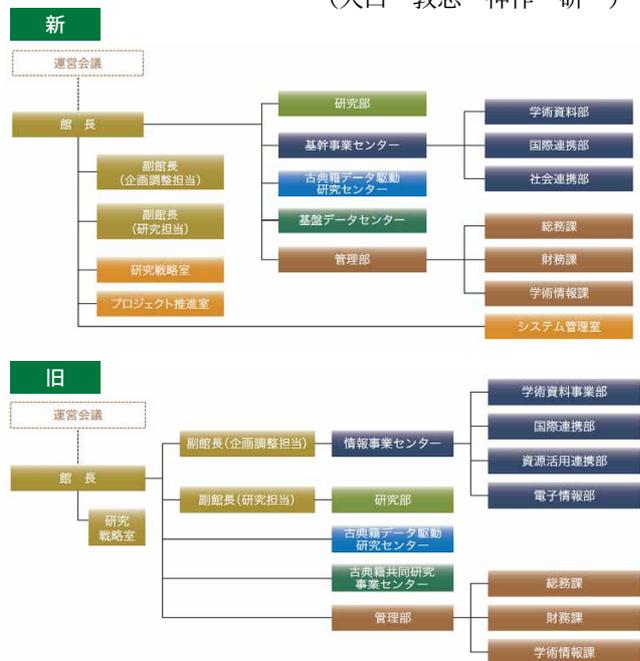
【3】情報事業センターを基幹事業センターに名称変更

既存の「情報事業センター」を「基幹事業センター」(センター長は入口敦志副館長)に名称変更し、3つの事業部(学術資料部・国際連携部・社会

連携部)を統括します。「学術資料事業部」を「学術資料部」に、「資源活用連携部」を「社会連携部」に、それぞれ名称変更するとともに、「電子情報部」を発展的に解消して「システム管理室」(室長は岡崎真紀子研究主幹)を新設します。

【4】古典籍データ駆動研究センターの機能強化

去る2022年度に新設した「古典籍データ駆動研究センター」(センター長は大山敬三特任教授)に、2024年度中に「先端研究支援ラボ」を設置します。
(入口 敦志・神作 研一)



松野一秀さま 紺綬褒章を受章

松野一秀さま(松野陽一^{まつのかずひで}国文研元館長の御令息)には、2023年9月23日(土)付けで栄えある紺綬褒章を受章されました(『官報』1078号、2023年10月10日)。松野陽一先生御所蔵の古典籍【大島雅太郎旧蔵の『千載和歌集』(〔室町前期〕写3冊)など計118点。国文研の文庫番号は「16】を、先生の御逝去後に国文研に寄贈された功績によるものです。松野さまは御夫妻で2024年2月14日(水)に来館し、松野文庫を収蔵している書庫も見学されました。(神作 研一)



2024年2月14日(水)、国文研館長室にて伝達式を挙行

*現在進行中の共同研究「国文学研究資料館松野陽一文庫の基礎的研究」(研究代表者は館野文昭埼玉大学准教授)の研究成果として、今秋9月5日(木)から10月22日(火)まで国文研展示室にて「松野文庫の贈りもの」展が開催され、9月27日(金)には「松野文庫セミナー」が開かれます。

国書データベースと写本

かつて私は、岩波書店『国書総目録』と首っ引きでしたが、もうそうした時代は過ぎ去ってしまったようです。その代わりに、国文研の「国書データベース」をイギリスの地から毎日使用しています。使い方はいろいろあると思いますが、最近、江戸時代の写本のことを調査していますので、いままでと違う使い方をしています。その一端をご紹介します。

「国書データベース」のHPには、「書誌」「著作」「著者」のいずれかから検索するように選択肢がありますが、「著作」を選択して、キーワードとして分類名を入れると、同分類の著作がすべて出てきます。たとえば「医学」だったら、なんと14168件の書名が出現します(2024年1月31日(水)アクセス以下同じ)。このような方法で検索すると、「貨幣」と分類された書籍が560件、「測量」と分類された書籍が894件、というように、江戸時代の分類別の件数が判明します。なぜそれほど多いのかと言いますと、それはその件数の大多数が実は写本だからです。測量書894件という結果が出ると、便利なことに、画面の左側に「刊写の別」という項目があり、測量書の場合、そこに「写本」444件、「刊本」67件、「？」1件と出ています。なぜ合計が894になっていないのかは分かりません。謎ですね。それはさておき、「刊本」の方をクリックすると、刊本の測量書が67件出てきますが、その中には移入唐本や明治時代の刊本も入っているのです、すべて江戸時代の日本刊本ではありません。それでも、一つ一つ辿って調べたなら、和算家の中根元珪が制作した『津原発揮』(元禄5年刊)が、刊年が明記してある一番古い刊本だと判るのです。ただ、67件の刊本に比べて、444件の写本の方が圧倒的に多い。これは、江戸時代の実録の研究ですでに明らかになっていることですが、写本の場合、内容が同じであっても書名がいささか違うということはよくある現象です。貨幣書の場合は、全560件のうち、「写本」121件、「刊本」90件、「？」1件という結果になりますが、一々調べていけば、欠如している348件も写本だということが判明します。

このように「国書データベース」を検索すると、各分類の写本件数が刊本のそれをかなり上回っていることが明瞭です。先述したように、異名同書のものでそのなかに入っているからです。しかも「国書データベース」に掲載されていない写本も少なくないので、実際の写本の件数はもっと高い数値になっているはずです。これから三つの例を挙げて考察していきます。

まず、越中国射水郡高木村(現、富山県射水市)在住の石黒信由は、和算家、測量家、天文学者として知

られており、多くの門人を抱えていました。庄屋の家に生まれた石黒は蔵書がとくに豊富だったので、近辺の同学者との間に身分を問わずの貸借関係がありました。石黒信由の旧蔵書籍は現在、射水市新湊博物館に所蔵されており、富山県教育委員会編『高樹文庫資料目録』(1979年)にリストアップされていますが、残念ながら「国書データベース」には掲載されていません。一例を挙げると、『新編累円術』は、「国書データベース」によれば東北大学蔵本しか記載されていませんが、高樹文庫にもあるのです。こうした目録データも益々充実してほしいものです。

次は、旧三井文庫の写本です。それはもともと三井家および三井文庫が収集していたもので、現在はカリフォルニア大学バークレー校の所蔵となっています。写本が同文庫の刊本と別置されていたせいか、長年、未整理のまま地下室に置かれていたため、あまり重要視されてこなかったようです。詳細は、長谷川強・渡辺守邦・伊井春樹・日野龍夫共編「カリフォルニア大学バークレー校旧三井文庫写本目録稿」(『国文学研究資料館調査研究報告』第5号所載、1984年)を参照していただきたいのですが、合計3500点前後の写本がリストアップされています。その中に由緒のある珍しい写本も入っているのですが、どうしたことか、そのデータがまだ「国書データベース」に掲載されていません。国文研の調査研究報告ですから反映して欲しいと思います。

最後に、小生の蔵書の中にも「国書データベース」でトレースできないものもあります。たとえば、『和方類林抜粹』(文政3年写)という医書は、明らかに『和方類林』という書籍を抜書きしたのですが、いずれも「国書データベース」に記載されていません。また、『今案集』(寛政8年写)は、奥書によれば享保年間まで遡り、蒔絵、漆器、瀬戸物など骨董品をテーマにした本です。それから『女中仕附方の事』(元禄13年写)は万治2年の写本を転写したもので、「国書データベース」に登録されていませんが、『女中躰方』、『女中しつけかた品々』など、類似書名の礼法書などは色々採録されており、その関係性を把握するためにも益々の画像化を期待したいものです。

今は広く認知されていますが、写本は、江戸時代の書籍文化において重要な役割を果たしていましたし、刊本にない知識が保存されています。ゆえに、「国書データベース」にますます写本が取り入れられたらありがたいですね。

(ケンブリッジ大学名誉教授 ピーター・コーニツキー)

第47回国際日本文学研究集会

2024年5月11日(土)・12日(日)、第47回国際日本文学研究集会がハイブリッドで開催されました。プログラムは研究発表14本、インフォメーション・セッション5本。各国の登壇者による多彩なテーマと研究手法の提示、充実した成果発表は大いに知的好奇心を刺激されるもので、活発な質疑応答が繰り広げられました。また、両日とも休憩時間などを利用して茶話会や研究交流会が行われ、会場は和やかな雰囲気になりました。オンラインにも時差を超えて多くの研究者をお迎えでき、のべ175名がご参加下さったのは嬉しい限りでした。

この集会の魅力の一つは、発表者ごとにコメントーターがついて議論を深め、フロアに討議を開いて下さることです。メンバーは企画に携わって下さっている館外委員の先生方や国文研の教員です。発表者には『国文学研究資料館紀要』文学研究篇への投稿資格が与えられ(審査あり)、査読付きの英文オンラインジャーナル SJLC への投稿も歓迎です。

新たな研究交流の場へぜひお越し頂きたい、お申し込みをお待ちしています。末筆ながら、このたびご参加下さった皆様に改めて御礼申し上げます。

(齋藤 真麻理)



2023年度第1回こくぶんけんトーク 安政期江戸の連続複合災害

2024年3月25日(月)、国文学研究資料館大会議室において、こくぶんけんトークを開催し、渡辺浩一教授による「安政期江戸の連続複合災害—1854~1859年—」というテーマで報告を頂いた後、参加者とともに意見交換をしました。

渡辺教授の報告は、江戸時代末期、いわゆる「幕末」と称される1850年代を対象として、江戸の街を襲った様々な災害とそれに対応する人々の様相について克明に描きました。当時の江戸では大火をはじめとして、安政の大地震、安政東日本台風による高潮と暴風、コレラ大流行という災害の被害に遭っていました。このような連続複合災害の被害の中、どのように「復興」が進められたのか、渡辺教授はこの点を人と人とのつながりによるものであると指摘しています。この人と人とのつながりというのは、近世社会特有の身分集団や社会集団であり、このような関係性が江戸の復興にたずさわったことを明らかにした報告でした。

参加者との意見交換では、江戸以外の事例や当時の天皇の役割はどのようなものであったかなど、活発な

議論が繰り広げられました。特に、この時代の江戸にいる将軍・幕府と京都にいる天皇・朝廷がどのように災害対応を行ったのかということに多くの発言がありました。

今年2024年元日の能登半島地震によって多くの被害が出て、いまだに被災地の人々は日常生活に戻る見通しが立っていません。そして、現在、連続複合災害の真ただ中にいます。2011年の東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故以来、2016年熊本地震、2018年西日本豪雨、2019年台風19号、さらに新型コロナ・パンデミックなどが続いてきました。この間にも大小の災害が起きており、どのように我々住民は「生存」を目指すか、渡辺教授の報告でヒントを得た気がしました。



(西村 慎太郎)

国際連携部「文献資料ワークショップ」～視野を広げて～

「文献資料ワークショップ」は、デジタル化が進む中でおもデータ化しにくいと指摘される研究ノウハウの伝達に関する問題と、アクセス自体が改善された一次資料の実際の利活用に際して不可欠な技術や経験の取得に関する問題を深く意識し、その解決に向けて貢献できるような試みとして2020年の秋に発足した、当館国際連携部の事業です。2022年以降に当館協定先ともなるIUC（アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター）との共催に移行し、ハイブリッド形式を毎回併用しながらも当館蔵の資料に実際に触れる対面中心の性格に重点を置いて行ってきました。

昨年度から感染対策の緩和により、初めて館外から講師を招聘することが叶いました。その成功をうけ、本年度も引き続き、同様に講師を広く募る予定です。

以下は、昨年度対面で参加した学生2人の観覧記を（一部）翻訳したものです。

（ノット・ジェフリー）

第9回

[2023年11月15日(水)]

「たった1枚・広がる世界―古筆切研究の方法と実践―」 久保木秀夫（日本大学教授）

マイケル・ジャド

本年11月に、IUC 生何人かで国文学研究資料館に向向いて、大変有益なイベントに参加することができました。久保木秀夫先生によるワークショップで、そのテーマは「古筆切」という種類の資料についてでした。冒頭の一時間は導入部分で、その大昔の資料の基本知識を学ぶことが中心でしたが、後半の一時間で私たちはそのような資料の実際例を自分の手に取り、詳しく見ることができました。特にIUCの書道サークルに参加している私にとっては、そこで練習してきたことと繋がっている気がして、全体的にとっても興味深いワークショップでした。



第10回

[2024年2月21日(水)]

「古活字版から見る日本の書物史」 佐々木孝浩（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授）

ワン・イーフェイー

今年2月の中旬に、私たちは国文学研究資料館開催のワークショップで、佐々木孝浩先生のご指導のもと、古活字版という資料について勉強することができました。最初に先生からきわめて詳しい説明があり、当時における印刷技術とそれによる出版の、複雑で多岐にわたる発展史の概略を教わりました。つづいて具体例の実見に入り、周回しつつ多くの古活字資料を細かく確認して、相互に比較する時間が与えられました。佐々木先生のお話についていながら、出版過程の様々な段階を資料の様子からも垣間見ることができるようになりました。美術史を専門としている私ですが、慶長年間の古活字版がこれまでも自分の研究に関わった経験が多少あり、それだけに今回のワークショップはやはりかなり面白く感じました。



2023年度「廣瀬資料館セミナー」の開催

2024年2月4日(日)、日田市複合文化施設 AOSE の2階会議室1において、当館主催の令和5年度廣瀬資料館セミナー(基幹研究「十九世紀地域文化拠点の総合的研究—廣瀬家を中心として—」〔研究代表者: 入口敦志教授])が開催されました。

当日は、太田尚宏(当館准教授)の「先賢文庫の資料を後世に伝える—保存環境の調査と改善—」、井上敏幸氏(佐賀大学特命教授)の「咸宜園名称考」という2つの研究発表が行われました。

一般に資料調査というと、古典籍や古文書に記されている内容や様式について調べるといったイメージですが、それに加えて、資料を後世へと確実に伝えていくためには、劣化防止や環境保全といった保存上の措置や方法についての調査も欠かせません。前者の発表は、経費がかからず小規模な資料館でも実施可能な資料保存の方法を工夫していく必要性について検討したものでした。

後者の井上氏の発表は、廣瀬淡窓が名付けた「咸宜

園」という名称の由来について、結社の名称が天保5年の「官府の難」(日田代官所による圧迫)を契機に変化していくこと、新塾・西塾→同社→宜園→咸宜園という名称の変化を指摘できることなどを、関係資料に基づきながら詳細に論じた内容でした。

当日は、40名の定員に対し57名もの方々が参加してくださり、座席が足らなくなるほどの盛会ぶりとなりました。(太田 尚宏)



「第2回 春曙文庫セミナー」開催

2024年3月2日(土)、大阪南港の相愛大学で「第2回 春曙文庫セミナー」が開催されました。

春曙文庫は、相愛学園創立100周年を記念し、相愛大学教授であった田中重太郎氏の旧蔵書を中心に設立された文庫です。田中氏の『枕草子』関係の古典籍を中心に、春曙文庫設立以前から大学が所蔵していた貴重書のほか、元学長の今小路覚瑞氏、短期大学教授であった柿谷雄三氏の旧蔵書も収められ、その内容は平安文学から近代文学まで多岐にわたります。

春曙文庫セミナーでは、そんな貴重書についてより広く、詳しく知っていただくこと、当館の特定研究(地域資料)「相愛大学「春曙文庫」に関する研究—書物と人」の研究メンバーを中心に、書物を介して行われたコミュニケーション、人と人とのつながりの在りようを紹介しています。

第2回となる今回は、基調講演に京都女子大学の中島和歌子教授をお迎えし、「清少納言の父—清原元輔と『枕草子』の関係」と題してご講演いただきました。『枕草子』成立の背景にあった父清原元輔の影響、心と詞を継承する姿をお示しいただきました。

続いて、川瀬紗佳氏(大阪大学大学院生)「国学者の『枕草子』研究—春曙文庫蔵『枕草子春曙抄』を手がかりとして—」、阿尾あすか准教授(相愛大学)「書写し伝える—柿谷雄三旧蔵『建礼門院右京大夫集』について—」、山本和明教授(国文学研究資料館)「柿谷文庫について」と、共同研究メンバー3名によって、春曙文庫が所蔵する名品や、春曙文庫設立にかかる柿谷氏のご尽力とその収集資料について、紹介しました。

講演・報告のあとは、そのまま春曙文庫の展示の観覧へ。セミナーの受講者に、今回のセミナーに合わせた特別展示をご覧いただきました。基調講演で話題に上った「清原元輔絵像」や、報告で取り上げられた『春曙抄』『建礼門院右京大夫集』も並び、講演・報告の内容を振り返りながらの観覧となりました。

「春曙文庫」の名のとおり、『枕草子』関係の貴重書を多く所蔵する春曙文庫ですが、それ以外にも多様な名品が所蔵されており、その資料を介してさまざまな時代の「人」が交流をもってきたことを確認する機会となったかと思います。

(大阪大学大学院日本学専攻博士後期課程 飯田 実花)

ないじえるアートトーク

「枕草子を書き終えようとする清少納言 ― 筆も使ひ果てて、これを書きはてばや ―」

制作進行中の新作『つるばみ色のなぎ子たち』で、清少納言の生きた時代と彼女をめぐる人々の物語を描いているAIRの片瀨須直氏(アニメーション映画監督、日本大学芸術学部特任教授・上席研究員)と、立正大学の山中悠希氏を迎え、2024年3月9日(土)に当館大会議室にてトークイベントを開催しました。公開中のパイロットフィルムに引用された『枕草子』の一文をめくり、前半では山中氏、後半では片瀨氏にお話をいただきました。司会は当館の中西智子が務めました。

山中氏はまず『枕草子』の写本について、さらに平安時代の文学における「序文」や「跋文」のあり方などについて解説しました。続いて片瀨氏は映像化に際して深く読み込んだ『枕草子』の内容から、書き手の多面的な性格について考察しました。

対談では、長期里居の期間に関する事柄、清少納言にとっての「書く」ことの意義、和泉式部との交流についてなど、仮説の提示を含めて存分に語り合いました。最後に会場からの質問を受け付けました。

大会議室の大きなスクリーンいっぱいに映し出されたパイロットフィルムの映像の美しさ、また音楽の抒

情性、会場を埋め尽くす老若男女の参加者の方々の熱気に胸打たれながら、「古典作品の変容と再生」という事柄について深く考えた一日でした。

(中西 智子)



文部科学省情報ひろば展示「震災・原発事故被災地における地域資料の保全と協働」

2024年2月21日(水)～3月25日(月)にかけて、文部科学省情報ひろばにおいて「震災・原発事故被災地における地域資料の保全と協働」という展示を行いました。この展示は人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「横断的・融合的な地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」国文学研究資料館ユニット「人口減少地域におけるアーカイブズと歴史文化の再構築」における成果として、震災・原発事故被災地域での地域歴史資料保全と継承について、自治体・地域住民と協働で行っている活動について示したパネル展示です。

展示物としては、原発事故被災地で歴史資料の保全活動をするためのタイベックスーツ(防護服)を着用したマネキンや帰還困難区域である大熊町での歴史資料保全活動の動画を流しました。また、研究成果のパネル展示としては以下のものなどを展示しました。

- 大関真由美・菅井優士・西村慎太郎「原子力災害被災地域の歴史資料の保存と自治体・住民との共有」
- 西村慎太郎・三原由起子「福島県浪江町の被災地における地域資料の保全」
- 大和田侑希・門馬健「小良ヶ浜における畜産」
- 天野真志「小良ヶ浜と縁故地引戻運動」

(西村 慎太郎)



総合研究大学院大学日本文学研究コースの近況

新入生懇談会を開催しました

2024年4月18日(木)、当コースでは今年度1名の入学生を迎えて、在学生・教員と共に新入生懇談会を行いました。当コースの教育研究プロジェクトによって研究上の価値を見出し、購入した日本古典籍をはじめ、近代作家の草稿など、国文学研究資料館の貴重書を含む原本について教員や在学生在が解説を行いました。参加者は熱心に聞き入り、それぞれの専門や関心に根ざした書物談義が繰り広げられました。続いて新入生の研究展望や、教員の文献調査の体験談などが語られ、和やかなひとときとなりました。

当コースは、国文学研究資料館の豊かな文献資料や、研究ネットワークを存分に活用できる点が大きなメリットです。今年度の新入生も、学位取得に向けて多くの文献資料に出会い、自身の研究手法を開拓して、充実した学生生活を送られることを願っています。



日本古典籍などの展観



懇談会の様子

2023年度特別講義

落合 博志 教授「古典の本文と出典・解釈」開催

2024年3月26日(火)、国文学研究資料館にて2023年度特別講義を対面とオンラインのハイブリッド形式で開催しました。講師を務めた落合教授は、3月末で定年退職を迎えることから今回が最終講義となり、館内外や海外から150名を超える聴講の申し込みがありました。



落合博志 教授

落合教授は「古典の本文と出典・解釈」のテーマで、説話や軍記、歌謡などについての新見を披露しました。特に芥川龍之介の作品形成の背後にある明治28年刊『日本風俗史』については、その挿絵までが参照されていた可能性など、多岐にわたって論じました。また、一文字の読みから作品の世界や意味が変わってしまうという視点を示し、学生の視野を広げる機会となりました。

会場には、落合教授と長年にわたって親交のあった関係者をはじめ、当コースの修了生が集まり、研究の歩みを熱心に聞き入っていました。

講義終了後には、3月末で定年退職を迎える落合教授と、相田准教授、野本准教授へ、学生から花束が贈られ、会場は大きな拍手で包まれました。

(齋藤 真麻理)



講義終了後の記念撮影

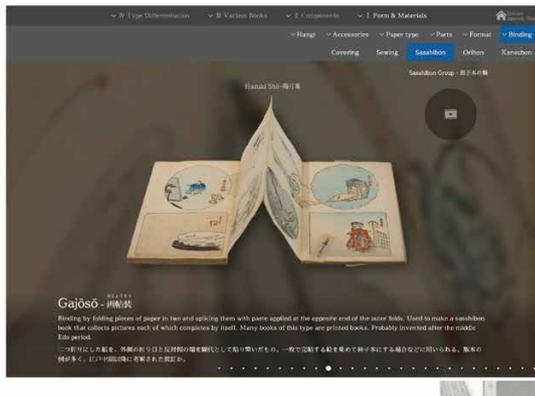
電子展示室「和書のさまざま」英語対応について

ウェブ版の展示「和書のさまざま」は、海外からも含め多くの皆さんにアクセスしていただいています。この度5月より、英語版を公開いたしました。古典文学や日本語の勉強をしている学生さんから、日本語は読めないけど興味があるという方々まで、勉強や楽しみの助けになるよう日本語を併記しています。メニューは展示構成が容易にわかるよう一般的な英語で表記しています。日本語で認知されている専門用語はそのままローマ字表記で残していますが(例 Orihon)、知らない日本語も直下のコンテンツ表示に英語解説があります。

展示内容は日本語版と同じく通常展示の構成に準じた、和書のさまざまな姿や特色を見ながら書誌学の基礎を理解できるものです。解説ビデオのナレーションは日本語ですが、分かり易い実演になっています。ご活用ください。

今年度も春の通常展示「和書のさまざま」を、4月18日(木)～8月9日(金)まで開催しています。水曜(第4を除く)も開室し、月曜～金曜までご覧いただけるようになりました。いつでも自由にお立ち寄りください。

利用の様子
ビデオはここから



英語版ウェブ展示
「和書のさまざま」
はここから



(北村 啓子)

表紙絵資料紹介



『源氏物語歌合絵巻』(当館蔵 貴重書 99-122)

室町後期写 卷子本1軸 紙高19.8cm (全長798.6cm)

作中人物同士に競わせた体の假想歌合を演出した『源氏物語歌合』という作品を絵巻に仕上げたもの。假想「参加者」ごとに、他本に見出だせないような色彩豊かな歌仙絵を飾り、同作品を伝える諸本の中でも本書は独特な存在。

『源氏物語』の場面場面で多くの人物が歌(和歌)を詠み、その総数は795首にも上る。享受資料として『源氏物語歌合』は原作文の中ら、計36人の詠作者による歌を三首ずつ(但し、人違いもあり)、計108首を並び、全員を18の二人組の左方か右方かに配分したうえ、全首を54番で対決者ごとに結番した。その他の掲載内容は伝本によるが、広本では冒頭に序と詠作者一覧を付し、また歌ごとにその詠まれた状況の分かる詞書も添えられる。作品の編者は未詳だが、その成立年代が鎌倉後期と考えられる。十数種の現存伝本は様々の形態・装丁で伝わり、その掲載歌等にも異同が報告されている。

本書は内題・外題ともなく(無記の題簽あり)、命名は内容による。奥書類の記述もない。伝本としては、序が備わっていても詠作者一覧と詞書を全く持たない等、略本的といえる要素もある。一方で奈良絵本との類似性も指摘されてきた当本の色彩歌仙絵は、他で確認できない特徴とみえる(白描絵巻は他に数例あり)。さらに、美術史的価値はさることながら、その略された文章と対照的に深まった視覚的享受といった特異性には、受容史に潜む多次元性を窺わせるような高い資料的価値も認められよう。

【左:表紙中央「左 六条院」(=光源氏)と対の「右 六条のみやす所」】 (ノット・ジェフリー)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

国文研ニュースNo.65
発行日 令和6(2024)年6月17日
編集 国文学研究資料館 社会連携部
製作 株式会社トリッド
©人間文化研究機構国文学研究資料館